

文部省唱歌誕生とその歴史的変遷のなかでの一つの問題点について II

—文部省唱歌「われは海の子」の作詞者はだれか—

鎌 田 範 政*

(2000年10月13日 受理)

A problem of the born and historic change of " SYOUKA " II
—Who wrote a poem " SYOUKA " ' WARAWEWA UMINOKO '

KAMADA Norimasa

キーワード：父母，兄弟姉妹，遺族，歌碑，現状

はじめに

1997年11月鹿児島大学教育学部実践紀要に同じ主題で発表してから，これまでの約3年が経過した。その間新しい資料や事実が次々に判明し，問題は大きく核心に迫りは始めている。そこで新しく出てきた新事実を其々の家族の順に列挙しながら宮原晃一郎の人物像を掘り下げて行くことにしたい。

1. 父・宮原知貞 生誕地は高知である。しかし誕生年月日は不明である。明治年間の鹿児島県庁職員名簿によると明治11年山本知貞とある。

記録に従って年代順に記す。

明治11年 4 月	カウチ	山本	知貞	十等属
明治12年 4 月	カウチ	山本	知貞	九等属
明治13年 4 月	鹿児島	宮原	知貞	八等属
明治14年 4 月	鹿児島	宮原	知貞	八等属
明治15年 4 月	鹿児島	宮原	知貞	七等属
明治16年 4 月	鹿児島	宮原	知貞	七等属
明治17年 4 月	鹿児島	宮原	知貞	六等属

明治10年の西南の役後，高知から鹿児島を治めるために官吏となって着任した。そして明治12～

*鹿児島大学教育学部音楽教育

13年の間に養子縁組し結婚した。宮原典子編によるとこの後、知貞は、

明治17年県庁を辞す。阪境鉄道会社勤務。

明治19年青森県大林区営林署主事勤務。

明治22年北海道炭坑鉄道会社勤務。

明治23年北海道炭坑鉄道会社岩見沢勤務。

明治26年保証負債をかかえ千島郡役所勤務。

明治29年札幌に法律事務所を開く。

明治37年4月15日卒中にて死去。

父知貞は、官吏として鹿児島に着任したものの7年弱で官吏の道を諦め、関西～青森～北海道と転転と職を変え、終には千島まで北上する波瀾万丈の人生を送っている。しかも土佐出身、気宇の大きい太っ腹な豪傑肌で人並みな道楽もしたらしく、その面では妻を悩ませもしたらしいという。

父に従っての転居は、見一郎にとって大変な幼少期を過ごしたに違いない。しかし母ヨ子（與弥）の理知的で聡明な影響を受け賢い子供に育っていった。

2. 祖母・久（ヒサ） 天保八年（1837）12月9日上村清蔵（寺社奉行所役人）の三女として出生。母名は不明。宮原壮一と結婚し安政六年（1859）12月11日長女ヨ子（與称）出生。

宮原典子編によれば、「祖母久は蔵役人益源左衛門に嫁しヨ子をもうけたが、ヨ子九歳の時夫が急死したため娘を連れて実家に戻り、新たに物奉行所の役人本田壮一を婿に迎えた。そして薩英戦争の際壮一が共に戦って戦死した宮原道之丞に子供がないためその名跡継いだのである。」とある。しかし、この間の経緯については、今のところ証明するものは出でいない。戸籍には父宮原壮一母ヒサ長女ヨ子と記載されているのみである。

3. 母・與弥（ヨ子） 出生安政6年（1859）12月11日。13歳の時、藩主島津家の奥御殿へ姫君付の侍女として奉公にあがり維新まで勤め、のち開設されたばかりの鹿児島女子師範学校に学んで結婚後も子供が出来るまで小学校で教鞭をとった。

今回入手したのは鹿児島女子師範学校の卒業証書である。（図1参照）裏面には「此證書ハ三ヶ年ヲ限リトス満期後猶教員タラント欲スル者は学業ノ試験シ更ニ證尺ウ与え事。

明治10年といえは西南の役の年である。戦いの年の1月に急遽卒業式を執り行い免許を与えたが3年

第五十二號	鹿児島縣女子師範學校	第五大學區	明治十五年一月二十五日	但此證書ヲ得タル者ハ縣内女子小學ノ訓導タル事ヲ免許スル者也	下等小學校授業方法卒業候事	學女	鹿	證書
						校子	児	
						印範	島	
						宮原與称	当縣士族	

図1. 母ヨ子の卒業証書（写）

後、更に教員をしたい者には試験を科す事としている。鹿児島女子師範学校同窓会の関係者に伺って見たが明治11年再開された女子師範学校からの記録はあるがそれ以前の記録はないとのことである。多分西南の役で鹿児島市が焦土と化し資料も焼失してしまったに違いない。この卒業証書は北海道に移住したため焼失を幸運にも免れたのである。それにしても資料をきちんと整理・保存していたことに驚きを感じずにはいられないのである。鹿児島女子師範学校の歴史上の貴重な資料の一つとなった。

4. 姉・清（セイ）

宮原典子編に一つ年上の姉清（セイ）がいる。と記載されているものの、存在のみでその生涯については全く不明であった。しかし、平成12年7月20日の歌碑除幕式を期にその一部が驚くべき偶然によって明らかになった。

除幕式関連のテレビ放送を見ていたご婦人が、作詞者宮原晃一郎の写真を見て、「あまりにも父親とそっくりなので胸騒ぎがして、わたしの父や祖母の古い写真を持って新聞社に駆け込みました。」新聞社では「今、鹿児島市近代文学館で『宮原晃一郎展』をやっているのですからにいかれたら……」と言われて参りました。ところが展示されている写真に祖母が晃一郎と一緒に写真に写っておりました。なんと写っていたのは私の祖母セイで、締めていた帯の柄まで一緒でした。さらに一緒に蔵田さんご夫妻も写っておりました。

蔵田さんとは戦後までお付き合いがあり、鹿児島においでになった時、私ども夫婦と子供一緒に磯御殿にご案内し、その時磯御殿の庭で一緒に撮影した写真も私の手元にありました。

この報せを受け、ご本人に電話をした。実はその方の御主人も音楽の先生であったし、ご息も教え子であったため、大変好意的にお話が進み「近日中、母の五年忌をいたします。兄弟姉妹が集まりますので祖母の記憶の整理と戸籍謄本を揃えて参りましょう。」という事になった。

戸籍謄本によればセイ（清）は「明治32年3月28日、北海道千島国紋那郡紋那村70番地2番3号宮原知貞長女婚姻け届受付け」と記載されている。出生明治14年7月9日。結婚した相手は鹿児島県曾於郡岩川町（現大隅町）の笠茂愛磨である。

同年明治32年7月15日に長男新誕生。しかし、明治33年8月8日協議離婚。除籍。大変短い結婚生活である。色々な事情があるようだが、この方のお話によれば、北海道の鹿児島の出身者の紹介で家柄の良いところからの嫁入りだったが、姑との折り合いが悪く、長男を産んですぐ離婚した。しかし、離婚後も息子新の世話を陰ながら応援したようである。息子新は勉学を東京でする際、蔵田家に下宿し、東京外語専門学校・仏語専攻に通った。のち台湾台中州豊原郡豊原街豊原644番地に在住し、現地の学校長を勤めたという。

この時、セイ（清）は息子新の台湾への送迎をわざわざ鹿児島から下関まで出掛けていったようで、亡くなるまで親子の縁は続いていたということである。「とても優しいお婆ちゃんであった。」と語られており、現在、鹿児島市の郡元墓地に埋葬されている。息子新は昭和15年には台湾より帰

国、鹿児島市の川島学園実業高等学校に勤務したが、外国語専門の教師ということで度々と特高が文書の翻訳等に学校を訪れる事も多く、昭和18年には志願してビルマに赴き戦死した。

新には二女一男の子供がおり、長女ヒロは岩川の黒石家へ二女ツヤは鹿児島市の床次家へ夫々嫁している。長男峻は現在山口に健在、高等専門学校教授。

今まで宮原一族の血縁関係者はないものと思われていたが、なんと鹿児島市に在住とはまさに「灯台下暗し」であった。多分北海道在住の遺族のかたがたもこの事は知らない事ではないと思われる。

鹿児島市立近代文学館が「宮原晃一郎展」を開催して頂いたことによって、ここにまた新たな事実が一つ判明したのである。晃一郎氏と笠茂新氏とは姉の子であり、叔父と甥の関係である。似ていて当然ではある。笠茂新氏にとって伯母あたる晃一郎の末妹ふみは、蔵田氏に嫁いだが子供に恵まれず養女も取らないで世を去った。笠茂新氏は勉学のため上京し、この蔵田ふみの家庭で下宿している。これも晃一郎の姉セイが息子の世話を妹に依頼したと考えられる。セイがとてもやさしい情の人であったという話は頷けるものがある。

末妹の主人蔵田氏は、武蔵野工大教授・武蔵野美術大講師であったという。晃一郎の娘典子が武蔵野美術大学に勤務している事を考えるとこの蔵田氏との関わりが浮上してくるようでもある。

5. 武蔵野美術大学は宮原典子の勤務先である。この武蔵野美術大学を軸に「われは海の子」のひとつのエピソードが広がっている。

瀧沢敬三氏（現在武蔵野美術大学広報室長）はドイツ協会の協会誌に次のような寄稿をされている。

「私は、33年前の1964年2月～10月まで早稲田大学ドイツ研究会学術調査団員の四人の一人として、およそ六ヶ月にわたる西ドイツ一周の体験をした。当初計画では、西ドイツ18の総合大学を訪問し、同時に60余りの都市を巡り、日本の紹介の講演会を催すことだった。そして同目的達成の手段として、自転車を選択したが、残念ながら私たち四人は、ミュンヘン出発後、丘陵地帯の多いドイツの地形には勝てず、ついに自転車から「フォルクスワーゲン」へと乗り換えざるを得なかった。

宮原典子さんと私たちの出会いは、自転車による最後の訪問地、南ドイツの片田舎にあるヘッセルベルグという小さな村の市民大学（VOLKS - HOCHSCHULE）の十日間の生活だった。

典子さんは早稲田大学ドイツ研究会の先輩で、私たちより先に同地に滞在され、私たちの訪問を手助けしてくれた。同校に到着した日の夕食後、ドイツの女性たちが、突然“われは海の子”を歌おうと言い出し、典子さんがピアノを弾き、私たちが少し歌うと、ドイツの女生徒たちも上手な日本語で続けた。この歌が宮原さんの父君の作品とは四人ともこの時初めて知った。異国の、しかも海と無縁の南独で、日本の唱歌“われは海の子”が、日独の若人により合唱されたのである。私はこの歌を耳にするたびに過ぎし日のかけがえのない“青春時代”を想起している。

6. 武蔵野美術大学広報室長瀧沢氏より宮原典子さんの書かれた「早稲田学報89年11月号」を頂いた。この存在は鹿児島県商工会議所会頭の大西洋逸氏からも情報を得ていたものであった。

父・宮原晃一郎と「我は海の子」と題する一文である。当時の宮原典子氏は武蔵野美術大学広報室主管であった。その文中前半でこの文をしたためるに至った動機と父・宮原晃一郎の業績について述べると共に、後半で次のように述べている。

私が小学生の時も、6年の国語と音楽の教科書にのっていた。6年生になって明日は国語の時間で習うことになったと家で話したある晩、母は文部省の通知書を出してきて見せてくれた。

この時父を含めた家族で「我は海の子」のことを話題にした唯一の機会であった。父は「佳作だったのに……たしか一等は大江山の鬼退治の話だったと思ったが消えてしまったなあ」というような話をしたように記憶している。その翌年父は亡くなり、話を聞く機会は永久になくなってしまった。最近になって文部省唱歌のルーツをさぐる、などということがマスコミの話題にもなるようになったが、昔はそんなことは誰も気にもとめなかったし話題にもならなかった。親戚知人は口込みで知ってはいたが、家族としても単に父の若き日の一事件というだけで、とりたてあげつらう程のことではなかった。

ただテレビの取材でも聞かれて困ったことは、この詩に歌われている海の舞台はどこの海であるかということであった。そのことについては何も父から私は聞いていないのである。父の死後私が早大3年の春休みに、母が父の生まれ故郷に行ってみよう、と言いだして二人で旅をしたことがあった。そして美しい錦江湾に浮かぶ櫻島を眺め、母は「我は海の子」の海は、この鹿児島の海に違いないと言ったものであった。

たしかにあの歌には、北海道の北の海のイメージはないように思う。しかし私は、あれは白砂青松の典型的な日本の海岸風景であり、ごく一般的な海といって良いのではないかと考える。むりにどこか特定の地名を挙げたり、結びつけて考えることは必要ないと思うのである。

ところで3月22日のテレビ放映を見て。次々と私は、新聞・雑誌の取材攻勢にあう羽目に陥った。まず、作詞当時父が奉職していた小樽新聞社の後身である北海道新聞の東京支社から社会部記者がやってきたのは至当なことであろう。

あの記事が掲載されると、今度は父の出身地鹿児島の地元紙から依頼されたといって共同通信社の女性記者が見えた。それから読売、教育音楽（音楽の友社判）等、の取材が初夏まで続いた。

そしてその反響も種々あって、いろいろな方から、大変なつかしい歌である、とか、人前で唯一歌った歌である、とかいうお手紙を頂いたことは嬉しいことであった。改めて詩を読み返してみると、なかなか名文名調子であると思わせる。

そして晩年は戦争が激しくなり、十分な治療も受けられず、逝ってしまい、幸せとは言えない生涯であったとしても、この歌一つが後世に残り広く歌いつがれていることを思うと、娘としては報われたのではないかという感慨を覚えるのである。（昭和32年独文）

7. 読売新聞1997年(平成9年)7月29日(日曜日)

うた物語 ———唱歌・童謡———

われは海の子 作詞・宮原晃一郎

作曲者不祥

生みの親80年も「不祥」

”海のロマン”描いた若き記者

というタイトルで記載されている内容はほぼ前述5.の早稲田学報と同じであるが記者の手で、(前略)晃一郎は後に、北欧文学者として数多くの訳書を残す一方、童話や少年向け冒険読み物も盛んに書いた。

「赤い鳥」に書いた作品は、「竜宮の犬」「漁師の冒険」などの昔話風の海辺の話が多い。

「少年倶楽部」には、軍艦を巧みに操る「軍艦富士のスエズ運河乗り切り」といった”熱血読み物”を書いている。牧歌的な童話と勇ましい男の物語。こうした著作の芽は、『われは海の子』の中に現れているようだ。(中略)

詩を作るににあたって、晃一郎の頭のなかに幼い日の故郷の海も含めて、実際に見た各地の海原も去来したことだろう。さらに、氷山が漂い、軍艦が活躍する様々な海もイメージしたはずだ。そういえば、母娘、どちらの考えも分かる気がする。(敬称略)浅見恭弘「写真」は宮原晃一郎が親しんだ鹿児島・錦江湾の浜辺が掲載されている。

この「うた物語」シリーズは1996年(平成8年)6月2日(日曜日)付けで始まったが2年10ヶ月続き、1999年3月末で終えた。読者の要望で本に纏められて、1997年8月25日第1刷発行の中では作詞者◆不詳となっており、次の数行が加筆されている。「この間のいきさつが一般に知られるようになったのは89年、典子が、文部省の懸賞募集当選通知などを公表したからだ。ただ、国語学者で小学唱歌の作詞委員長を務めた芳賀矢一が作者とする説などもあり、現状では「作詞者不詳」となっている。」

このように読売新聞社文化部の著述の中での変移には何かそこにあったのではないかと思われ、その経緯について伺いたいと思うのである。

8. 最近ビクターより刊行された『日本唱歌全集』の中で、編集員の赤井励氏が分担著述している「賛美歌調唱歌の完成～読本唱歌 CD11」の21我は海の子では、次のようにこの詩・曲を紹介している。

《尋常小学読本唱歌》の21曲目。国民学校でも教えられ、最近テンポを遅くしてコマーシャルに使用されるなど、長い生命をもつ変ホ長調の名旋律。明治時代の唱歌中、もっとも有名な曲のひとつ。しかし歌詞はたしかに古くなり、「とまや」「丈余のろかい」「かひな」など死語・古語が多く、このままでは子どもには歌いにくい。

小学校の教材としての残すより歌曲として残す方向が望ましい。文部省の《新訂尋常小学唱歌》

六学年の伴奏譜を見ると、バスがオルガンのペダル鍵盤のように対位的に動き回り、なかなか元気なありさまに嬉しい気がする。

親しまれただけに、〈われはノミの子〉などいろいろな替え歌があるそうだ。森銃三著『明治東京逸聞史』に宮原晃一郎作詞という有力な伝聞がある。宮原が文部省の歌詞募集に応募して当選、少し改作されて小学読本に発表された、と森が宮原本人から聞いたという。さらに作曲のほうの原資料の発見を待とう。森銃三著『明治東京逸聞史』なるものを、なんとしてでも見付けだしたいものである。

9. 小樽市在住の栗原俊男氏から札幌市立創成小学校の同窓会名簿の写を戴いた。栗原氏は現在小樽市に在住であるが、戦前中国山東省青島市の国民学校の先生であり、筆者の実姉の担任であった。西郷南州の研究家であり、鹿児島に良くこられていたのである。小樽市文学館を訪れた際に「これお土産」と戴いたのが宮原晃一郎（知久）の名前が記載されている同窓会名簿であった。それによると明治26年4月～30年3月までの4年間に席卒業している事になっている。話はやや横道にそれるが同名簿の同窓生に町村敬貴（元町村文部大臣・現文部科学大臣の父親）の名も見られる。

そこで学校の学籍簿などの記録がないかと問い合わせた。創成小学校の櫻庭 實氏から次のような返事を戴いた。

「前略、お便りを拝見いたしました。本校は明治4年10月開拓史により寺小屋「資生館」として創立したのが始まりで、札幌で一番古い（歴史のある）学校とされています。

明治5年には、札幌学校、明治8年には雨竜学校、明治9年公立第一小学校、明治14年公立創成学校、さらに明治16年には公立創成小学校と改称を重ねてきました。そして明治29年11月には創成尋常小学校（後に中央創成小学校）と創成高等小学校（後に西創成小学校）に分離しましたが、昭和40年4月再び札幌市立創成小学校として統合され現在に至っております。

お尋ねの宮原知久について在学していたのは、公立創成小学校の時代で、その時の学籍簿等の資料はありません。ただわかっていることは『北海道土族宮原知久、明治15年5月生、明治26年10月2日入学、明治28年3月11日退学、岩見沢小学校尋常科卒業』だけです。

宮原晃一郎氏が「われは海の子」の作詞者として本校に在学していたことは大変名誉なことだと思います。本校には「どんぐりころころ」や「とんび」等を作曲した梁田 貞氏も同じような時期に在学しております。

お役に立つ返事にならず申し訳なく思います。ご活躍を御祈念申し上げます。

創成小学校 櫻庭 實

宮原晃一郎の小学校卒業に関する自身の記述、「小学校を飛び級して1年早く完全に卒業は指定しない。」という詳しい日付まで、この手紙で判明した。丁度、教育のためと札幌に家を建てたのだが父の事業の失敗、保証による財産の整理とともに岩見沢に帰らざるを得なかった時期でもあったのだった。

お わ り に

同じ題名でパートⅠを紀要にまとめてから、約3年の月日が経過した。その間、いろいろな情報を頂く機会が増え、新たな資料が入手出来たことは、幸運なことであった。なかでも鹿児島市の近代文学館で開催された『宮原晃一郎展』は、今まで血縁のある遺族は居ないと思われていたのに、お膝元の鹿児島市に在住していらっしゃったことは、とても嬉しいニュースであった。

これからも次々に新しい事実が発見され、「われは海の子」の作者が宮原晃一郎であることの証明が出来ればこんな嬉しいことはない。しかし、時代が経てばたつほど関係者が少なくなっていくことを考えると決着を早く望みたいものである。

また、宮原晃一郎は文部省唱歌「われは海の子」のみでなく、文学者、翻訳家、児童文学者としての評価が未だである。京都教育大学教授位藤紀美子氏の書いた論文しか存在しないのではないかとされる。この方面の研究をぜひ多く出てくることを心から願わずにはいられないのである。

そして著作権の問題もどのようにしたら解決できるのかこれからのひとつの問題でもある。

資料 14

「われは海の子」の作詞者が宮原晃一郎であることの証拠となった資料二点

発圖二三四號

過般本省ニ於テ新體詩懸賞募集之處今般審査之結果貴下應募二係ル

第三部海の子佳作ト認めラレ賞金拾五圓授與相成候条御承知有之度金圓交付方二付テハ追テ本省會計課ヨリ通知可有之候此段及通牒候也

明治四一年十二月十九日

文部大臣官房圖書課長

文部書記官 渡部董之介 (印)

宮原 知久 殿

追テ不日著作權讓渡登錄願送付可致候条御捺印相成度此段申添候也

(読み下し文)

発圖二三四号

過般本省に於て新体詩懸賞募集の処、今般審査の結果、貴下応募に係る

第三部海の子佳作と認められ、賞金十五圓授与相成り候条、御承知之れ有りと、金圓交付方に付ては追て本省會計課より通知之れ有るべく候。此段通牒に及び候也。

明治四十一年十二月十九日

文部大臣官房圖書課長

文部書記官 渡部董之介 (印)

宮原知久殿

追て日ならず著作權讓渡登錄願送付致すべく候条、御捺印相成りたく此段申し添へ候也。

(読み下し文)

拝啓(さき)に本省募集に係る新体詩中、貴下応募

の海の子入選の儀、通知に及び

候処、右著作權讓り受けの登録致したく候間、別紙登録請求書

回付に及び候条、住所族籍氏名

御記入御調印の上、至急御返送

相願ひたく此段申し進ぜ候。敬具

明治四十二年一月廿六日

文部省官房圖書課長

文部書記官 渡部董之介

拝啓(さき)に本省募集に

係ル新體詩中貴下應募

ノ海の子入選ノ儀及通知

候處右著作權讓受ノ登録

致度候間別紙登録請求書

及回付候条住所族籍氏名

御記入御調印ノ上至急御返送

相願度此段申進候 敬具

明治四十二年一月廿六日

文部省官房圖書課長

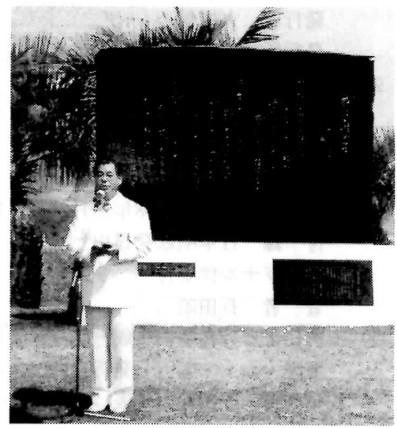
文部書記官 渡部董之介



資料 15 姉セイ(静)



資料 15
セイ(静)の息子
笠森 新



資料 16
平成 12 年(2000 年) 7 月 20 日
建立の歌碑

参 考 文 献

- 1) 鹿児島県庁職員名簿 明治編
上町 竹ノ内氏 提供
鹿児島市近代文学館経由
- 2) 宮原與弥(ヨ子)
鹿児島女子師範学校卒業証書(写)
- 3) 宮原家戸籍謄本(写)
2. 3. 共 佐野尚郎氏提供
北海道小樽市在住
- 4) 東京日独協会機関誌 10頁
BRIEF Ean DieBrucke
- 5) DEUTSCHLAND
MIT
JUNGEN AUGEN
GESEHEN
Garten Sondernummer 44
Deutscher Studienverein
der
Universitat Waseda
Tokyo Japan
- 6) 早稲田学報 89年11月号
父・宮原晃一郎と「我は海の子」
宮原典子(武蔵野美術大学広報室長)
- 7) 読売新聞 1997年(平成9年)7月27日(日曜日)
うた 物語-唱歌・童謡-
4. ~7. は東京都在住 瀧沢敬三氏 提供
(現:武蔵野美術大学広報室長)
- 8) 唱歌・童謡ものがたり 1999年8月25日 第1刷発行
著 者 読売新聞文化部

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店

- 9) 心して童謡・唱歌 1999年9月15日 初版第1刷発行

著 者 縄野欣弘

発行者 葦澤潤一郎

発行所 株式会社 文芸社

- 10) 日本唱歌名曲集 1998年2月20日 第1版第1刷発行

付 録 日本唱歌発達史

オリジナル伴奏付

著 者 長田暁二

- 11) 原典による近代唱歌集成－誕生・変遷・伝播－

解説・論文・索引 発行日2000年4月21日

編集委員 安田寛(代表)・赤井励・関唐燦

発行所・発売元 ビクターエンタテインメント株式会社

「賛美歌調唱歌の完成～読本唱歌」CD11

著 赤井 励

- 12) 札幌市創成小学校 卒業名簿

小樽市 栗原俊男氏 提供

- 13) 手紙文

札幌市創成小学校校長 櫻庭 實氏

- 14) 「われは海の子」の作詞者が宮原見一郎であることの証拠となった資料二点
(読み下し文) 鹿児島市近代文学館提供

- 15) 姉セイ(清)の写真 およびその子息 笠茂 新氏の写真
床次ツヤ氏提供

- 16) 平成12年(2000)7月20日

鹿児島市祇園之州公園に建立した歌碑